The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

存覚と仏心宗
――『歩船鈔』の一考察――

龍口恭子

はじめに

存覚は父の跡を継ぎ、浄土真宗教団の総帥の役割を果たすために覚如のもとに帰るまで、十宗について、修学、修行する機会を得た。そしてその後もかって学んだことや、人間的な繋がりを大切にした。その結果、それぞれの宗派の神髄を表現し得たのである。

前稿(1)では、存覚の修学、修行の跡を、当時の基礎的学問である漢文の修得をはじめとして、法相・天台・真言を中心に辿ったが、本稿では「仏心宗」について検討する。存覚が虎関師錬を初め、禅宗の僧侶と親しく交流したことは『一期記』『鑑古録』等に明かである。この時代の仏心宗の特質も考慮に入れつつ、『歩船鈔』との関連を考えてみたい。

一　虎関師錬との関わり

存覚は、二十歳の時、京都東山毘沙門谷の光明峰寺の証聞院で、一年間、供僧をしていた。存覚が母の助力でこの寺に職を得たものであったことを後年、

存覚は『歩船鈔』（一三三八年成立）において浄土宗（真宗を含む）の教えが末法の時機に相応していることを説いた。当時、平安期までの八宗に加えて、浄土宗・禅宗（仏心宗）の二宗も隆盛を極めていたが、その中にあって、

一代の諸教まちまちにわかれて、諸宗の所談各別なり。別なりといへども帰するところの極理は一致なり。

『歩船鈔』（真聖全　三　二二一頁）

と、仏教各派の到達するところが一致するものであり、偏執があってはならないと説く。これら十宗の教義を十分に把握し、各宗の宗旨がそれぞれ優れている点を縷々述べた上で、

無始以来惑染に覆蔽せられたる下根の凡夫、よく証悟して心性の本分をあらはさむこと、末世にはありがたかるべし。

『歩船鈔』（真聖全　三　二四八頁）

と、末世における凡夫の進むべき道を示したのである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

九月之比、老母経歴処々、器量聡敏僧若所要事者、可挙之由被示之処、至毘沙門谷、寺務証聞院僧正観高坊被述上件之子細之間、……『常楽台主老衲一期記』（真宗史料集成　第一巻　八六九頁）

と、『一期記』に述べている。この時、存覚は朝遍阿闍梨が遁世したその闕を補うための尊勝陀羅尼の供僧となったのである。

光明峯寺は九条兼実の孫、九条道家の創建にかかり、嘉禎四年（一二三八）に出家した道家は余生をこの光明峰寺で送ったが、この寺はまた、円爾を開山として寛元元年（一二四三）に創建された東福寺に隣接していた。

さて、その後存覚は二十二歳より父覚如と共に浄土真宗の弘教に従うのであるが、存覚四十二歳（一三三二年）の時、当時東福寺海蔵院に住持していた虎関師錬（一二七八～一三四六）との交流を伝える寂慧の『鑑古録』に注目したい。

光祖（存覚の長男）モトモニ居住ニツキ、存師モ時々彼ノ寺ヘ往来アテ、海蔵院ノ師錬禅衲ト入魂シタマフ。

『鑑古録』上（真宗全書　六十八巻　三七三頁）

この時のことを、『鑑古録』は次のように記している。

或日、存師ト師錬ト対譚闌（たけな）ハニシテ、互ニ両脚ヲノベテ、安臥シタマフトキ、二師ノ夢ニ、蔵経ノ中ヘ脚ヲフミ入ルトミテ、……

『鑑古録』上（真宗全書　六十八巻　三七三頁）

二人は、大蔵経の中に入るという同じ夢を見ていたのである。その夢は後漢の光武帝と子陵の不吉な夢と似ているが、これは互いに「智徳博識ノ俊衲」の人同士の話であると、時人は感心したという。このような師錬との交流は、禅宗についての知識は無論のこと、宗派は違えど、仏教全般にわたる広い視野を与えてくれたと思われる。

虎関師錬は元亨二年（一三二二）に『元亨釈書』を書いていた。『元亨釈書』は禅宗を主軸として、初の日本仏教通史を構築することを試みた画期的なものであった。

『元亨釈書』によれば、師錬の師、東山湛照の師である臨済宗東福寺円爾弁円のことは特に詳細であり、東福寺は中国から帰朝して博多に滞在していた円爾を招いて、当時としては最新の情報を発信する基地にすべく、創建されたものであった。その円爾の教えを受け継ぎ、新しい思想を打ち立てる気概に満ちていたのが師錬であった。

師錬は八歳で三聖寺東山湛照に入門の後、比叡山で受戒、その後は京都、鎌倉で修行を積み、帰京して漢学者菅原在輔に師事後、東福寺に入った。漢学者を輩出した日野家の血筋を引く存覚とは互いにその気風を認め合った無二の親友となれたものであろう。

さて、存覚はこの証聞院に出仕したのは二〇歳前後の一年間であったが、その後も、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

閏六月二十三日、慈俊法師　十七歳童名光珠　向毘沙門谷殿法印　九条禅太閤御息忠恵　坊。（応長元年　存覚二十二歳）

と、弟をこの寺に入れさせたり、

光威丸向毘沙門堂、住証門院、……（康永二年　存覚五十四歳）

と、三男綱厳を仕えさせ、証門院との繋がりを保ったようである。

二　無住との関わり

のみならず、存覚四十二歳（元弘元年（一三三一））の時、関東に下ったのであるが、その時、存覚の長男、柏庭（光星丸）は、『一期記』によれば、

柏庭者無住和尚同宿之処、塔主辞仁和寺籠居之刻、住東福寺普門院、……　『一期記』（真宗史料集成　第一巻　八七二頁）

とあり、柏庭は仁和寺の無住思賢の元にあったが、無住が仁和寺から妙光寺に移った時に、柏庭は東福寺の普門院に預けられたようである。こうして東福寺とも直接、縁ができたと言える。

無住は、師蛮の『延宝伝灯録』によれば、相模国の聞修寺の開基となった人である。

参法燈之禅、遂得玄機。出世紀之興国。移洛之妙光。後開聞修寺、為第一世。

『延宝伝灯録』第一五（大日本仏教全書　第一〇八冊　二一三頁）

法燈国師（無本覚心）に参禅し、玄機を得、和歌山の興国寺を経て、京都宇多野の妙光寺に入った。後に相模の聞修寺に赴いたという。『一期記』には、存覚四十三歳の項に、

仁和寺妙光寺塔主無住禅師下向関東之間、就予申承、彼禅尼与坊主親服之間、依其引導、光女為長楽寺禅尼養子同宿。

『一期記』（真宗史料集成　第一巻　八七二頁）

とある。四十二歳から四十三歳にかけて、存覚が鎌倉に滞在した時、存覚・無住の二人は会い、無住はまた偶然にも長楽寺禅尼とも親しくしていた関係で、無住の導きにより、存覚の長女、光女はその禅尼の養女となったのである。

このように臨済宗の無住との繋がりは、存覚の長男・長女を通じてより深くなったと言え、自ずから禅僧を知り、さらに禅宗そのものを知る機縁ができたとも言えるのである。

三　『宗鏡録』について

第一節、第二節で述べたように、存覚は、虎関師錬・無住思賢、及びこの人々に関係する禅侶から影響を受けたのは間違いないと思われるが、禅宗についての思想的把握は如何なるものであったかについて考察したい。

禅に関するものとして当時最も一般的であったものの一つに北宋の永明延寿の『宗鏡録』がある。この伝統は師錬の師である東福寺の円爾においても既にあった。即ち、『宗鏡録』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は円爾が中国より将来し、寛元三年（一二四五）、その書を後嵯峨天皇に献上し、またその翌年この書を講じたことが、『聖一国師年譜』に見える。『宗鏡録』は永超の『東域伝灯録』（一〇九四年成立）に既に見えるので、早くより我が国に伝わってはいたものの、この円爾の将来によって、ますます広い普及をみたのである。

『宗鏡録』は禅教一致を標榜したものであり、禅教一致の風が盛んであった臨済宗東福寺を中心として、「鎌倉以後南北朝時代にかけて禅宗教団発展のために一役を荷い、これに資するところ大であった」[2]との先学の御指摘があるが、それは禅宗のみならず存覚のような浄土教系統の教団においても、影響を与えつつあったことが、『歩船鈔』の記述で伺えるのである。

『歩船鈔』本文の禅宗関係の用語で『宗鏡録』に見えるものをあげると、次のようなものがある。

仏心宗・達磨大師・教外別伝・直指人心・見性成仏・以心伝心・亡縁而内照・本来面目・善悪都莫思量・即言亡言・小林九年面壁・見聞覚知・義理解了

これらの語句は禅宗の用語として特殊なものとは言えないので、必ずしも『宗鏡録』に依る必要はなかったかもしれない。しかし次のような用例は、明かに『宗鏡録』によったものと考えられる。

1、一物をみざるをなづけて見道とし、一物を行ぜざるをなづけて行道とす。　『歩船鈔』（真聖全　三　二四六頁）

此人慧眼開。智者任物不任己。即無取捨違順。愚者任己不任物。即有取捨違順不見一物。名為見道。不行一物。名為行道。即一切処無。処即是法処。即作処無作処。無作法。

『宗鏡録』（大正蔵　四八巻　九三九頁）

2、また馬祖大師・本浄大師等のごときは、ひろく経論を通じて自心を円悟すとみえたり

『歩船鈔』（真聖全　三　二四八頁）

且如西天上代二十八祖此土六祖。乃至洪州馬祖大師。及南陽忠国師鵝湖大義禅師思空山本浄禅師等。並博通経論円悟自心。所有示徒皆引誠証。終不出自胸臆妄有指陳。是以綿歴歳華真風不墜。

『宗鏡録』（大正蔵　四八巻　四八一頁）

特に2の例、「本浄大師」が注目される。六祖慧能の高弟に馬祖道一があり、同じく慧能の法嗣として本浄大師が知られていた。（『祖堂集』『景徳伝灯録』等）。しかし、日本では必ずしも高名な訳でない。しかしこの文脈からすると、馬祖大師・本浄大師は「経論」を広く渉猟することを通じて自己の悟りを得たというものであり、これは明らかに『宗鏡録』に基づいたものと言える。

さて、『宗鏡録』の思想的特色の一つとしてあげられるのは「一心」である。その序に、

今詳祖仏大意経論正宗。削去繁文。唯捜要旨。仮申問答。広引証

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

明。挙一心為宗。照万法如鏡。編連古製之深義。撮略宝蔵之円詮。同此顕揚。称之曰録。分為百巻。

『宗鏡録』（大正蔵　四八巻　四一五頁）

というように、「一心」が重要になっているのに、存覚は『歩船鈔』ではこの語に触れていない。これは「一心」の語は、浄土宗・真宗の中でも重要な概念であり、またこの「一心」は他の宗派においても、重要とみなしており、その異同の論述は困難であると判断したためではないかと考えられるのである。

むすび

『歩船鈔』の仏心宗の項の記述を形成していると考えられる存覚と仏心宗との関連を考察して来た。虎関師錬、無住思賢等、禅僧との交流、また『宗鏡録』等、禅典籍を読み込むことが、真宗僧侶存覚に与えた影響は大なるものがあった。

末世の凡夫の得脱は念仏以外にないという存覚の考えは、当時隆盛した仏心宗を正しく理解することによってより確かなものになって行ったと言えよう。

1　拙稿参照。「『歩船鈔』における十宗―存覚の修学の系譜を中心に―」（『印度学仏教学研究』第五七巻一号、二〇〇八）・「存覚『歩船鈔』と十宗―仏教概論としての構想―」（『印度学仏教学研究』第五十八巻一号、二〇〇九）。

2　今枝愛真「宗鏡録と鎌倉初期禅林」（『日本仏教』第七号、一九六〇）。

〈キーワード〉　存覚、『歩船鈔』、『宗鏡録』、虎関師錬、無住思賢

（東方学院講師）

NII-Electronic Library Service